

雄飛の滝線歩道

(ゆうひのたきせんほどう)

塩原随一の渓谷美を誇る秘境・・・「スッカン沢」の森へ！
川瀬巴水（かわせはすい）の描いた名瀑と景観を目指し、
奥蘭田（おくらんでん）「塩溪紀勝（えんけいきしょう）」の世界を歩く。

日光国立公園塩原温泉郷の渓谷景観をつくりだす、
箒川（ほうきがわ）は、那珂川水系のひとつです。
その源は、那須塩原市と矢板市・塩谷町・日光市に
またがる連山、「高原山」に源頭部です。
箒川の支流のひとつ、鹿股川（かのまたかわ）もまた
高原山麓が源となります。
その源が、「桜沢（さくらさわ）」と「スッカン沢」
であり、その渓谷景観と森は「塩原の秘境」と言わ
れ、明治・大正時代から現在にいたるまで、多くの
人々を魅了し続けています。



散策路からみるスッカン沢の流れ

「スッカン沢（スッカンブルー）」

その呼び名の由来は、スッカン沢を流れる水は、場所によっては青白く見えます。
これは、スッカン沢が高原山のカルデラ跡を水源とし、鉱物や炭酸等の火山の成分が多く含まれている水が流れているためです。そのためこの沢の水は昔、辛くて飲めないことから「酢辛い沢」等と呼ばれていました。
この呼び方がなまって、今の「スッカン沢」となったと言われています。
スッカンブルーは、日差しの入り方や、曇り雨の天候の時など、気象状況・時間帯により、その輝きを変えます。
この渓谷の森を訪れた時の、一期一会を堪能して頂きたいと思います。



〈雄飛の滝線歩道へのアクセス・・・車で〉

- 塩原温泉ビジターセンター（温泉街）から
⇒ 雄飛の滝線歩道駐車場まで
（日塩もみじらいん経由）18.9km 約 45 分
（公共の交通機関はございません。）

〈雄飛の滝線歩道〉

- 工 程：往復 約 3 km
- 所要時間：往復 約 3 時間
（記載時間には休憩時間は含まれておりません。）

〈散策路状況の情報収集を十分して訪れてください。〉

- ◆散策時はトレッキングシューズで！
- ◆本散策コース上、「雄飛の滝」（滝の下）に行くためには、一部歩道を外れ、沢筋をたどるルート（約 100M）箇所有り。（案内標識無し）。その箇所は、沢の増水等により状況が毎年変わる。訪れる際は無理をせず、安全に十分配慮したい。
- ◆気象状況には十分に配慮し無理をしない。
渓谷の上流エリアになるため、局地的豪雨など急な天候変化時は、またたくまに水量が増水する。安全散策を心がけたい。

「奥蘭田（おくらんでん）」（1836-1897（明治30年））

「塩原三恩人」のひとり。その生涯を商業に置き、幕末から明治にかけて多くの事業を興した東京実業界の重鎮でした。また、幼少の頃より漢学や絵画に親しみ風流を愛する多芸多能な人物でもありました。

明治21年（1888年）蘭田は景勝の地、塩原温泉に別荘「静寄軒」を構え、塩原の自然・温泉・地理・産物などさまざまな分野を探り、明治23年（1890年）に「塩溪紀勝（えんけいししょう）」という書物にまとめ出版しました。すなわちこれが世に出回った最初の、塩原温泉郷紹介の書物でした。

原文は漢文体で、詩画を配し、塩原の景色を十八景に分けています。これによって塩原の美しい自然や良質の温泉は広く人々に知られ、観光客の増加につながりました。

書物の中で蘭田は、スッカン沢（雄飛の滝線歩道）や、桜沢（八方ヶ原線歩道）の渓谷を詳細に記載し、その渓谷美を絶賛しています。

また、原文が漢文体、詩画を配していたため、このふたつの渓谷にある名瀑の名前に難しい漢字が使用されているのはこのためです。



そ れ ん 素 藤 の 滝

散策路から観るスッカン沢対岸の岩肌には、いく筋もの伏流水が流れ落ちています。

潜流瀑であり、その様はまるで白い糸が岩をおおいつくす簾（すだれ）の姿に見えることから、「すだれ滝」とも言われています。

- ◆潜流瀑であり、渓谷の樹木が生茂るとその全容をなかなか見ることは出来ないが、その水の落ちる音が響き渡る景観渓谷美のひとつです。



に き ぶ ろ う 仁 三 郎 の 滝

この滝を、最初に見つけた人の名をとってこの名が付けられたと言われています。

また、舞踏場のような滝つぼの上に流れ落ちる滝が、白いスカートをもった乙女のようにみえることから「舞姫滝（まいひめのたき）」とも言われています。

- ◆散策路から見下ろす滝と、滝の下流湾曲するスッカン沢の渓谷景観も、本散策路のみどころのひとつです。



スッカン橋からの「大カツラ」や、^{なぎなた}「薙刀岩」にはじまる、柱状節理群が創りだす渓谷景観。その渓谷の空間を堪能する。

この溪には「蟒蝮桂樹（もうかつけいじゅ）」

大蛇のようなカツラの大木

※奥蘭田（おくらんでん）「塩溪紀勝」より

- ◆樹齢は不明ですが、現在はこの歩道随一のビューポイントとして、散策路が整備されています。

スッカン沢の渓谷の森は、カツラ・サワグルミの巨樹巨木が多く点在しており、那須塩原市においても、この森林形態と植物群落は、貴重フィールドとされており、四季折々の渓谷美を作り出しています。



な ぎ な た い わ
薙 刀 岩

スッカン橋を渡った先にある見事な岩盤の一部。
 その形からこの名が付けられました。



スッカン沢沿いの散策から薙刀岩を見上げる



スッカン沢の渓谷を形成する「柱状節理群」

「柱状節理群」が創りだす景観渓谷美

ひん岩という種類の火成岩で、高原山の噴火で流れ出た溶岩が、冷えて柱状にひび割れ固まる事でできる、柱状節理（ちゅうじょうせつり）という現象によって作り出されたものです。

湾曲したスッカン沢渓谷では、この様な火山によって作りだされた岩肌が多く点在し、見事な渓谷景観をつくり出しているのです。

ゆ う ひ
雄 飛 の 滝

「落差約15mで、観滝すこぶる宜しく
 夕日(雄飛)の暮れるのも忘れる」という。
 滝はごうごうと百竜の流れを争って登るようであり、
 万雷の空を踏んで落ちる。落ちた滝水は、飛沫となり
 跳上り霧となり、滝を見る人の襟を濡らし神気の遭遇
 である。

※奥蘭田（おくらんでん）「塩溪紀勝」より。

岩に囲まれた薄暗い場所に差す一筋の光のように見え、夕日
 が暮れるのも忘れるくらい美しいと言われることから名
 前のついた滝です。



散策路「観爆台」から見下ろす雄飛の滝

雄飛の滝線歩道 スッカン沢の四季



スッカン沢渓谷に架かる「スッカン橋」

「川瀬巴水（かわせはすい）」（1883（明治16）年-1957（昭和32）年）

〈塩原の自然と温泉郷を愛した新版画の洗掘者〉

東京都出身。大正・昭和に活躍をした近代日本を代表する浮世絵師、版画家。衰退した江戸時代の浮世絵版画を、再興すべくより優れた技法で、新しい浮世絵版画である「新版画（最後の浮世絵とも言われる）」を確立した人物のひとりであり、その中心的絵師・作家です。

日本各地を旅行し旅先で写生した絵を原画とした版画作品を数多く発表しています。日本的な美しい原風景や日本人の心を叙情豊かに表現し、「旅情詩人」「旅の版画家」「昭和の広重」とも呼ばれています。

その作品は、国内はもちろんですが、むしろ外国での評価が高く、日本が誇る浮世絵師の葛飾北斎・歌川広重等と並び称される程の人気と知名度を誇ります。あのアメリカを代表する企業、アップル社の共同設立者のひとりスティーヴ・ジョブズ氏も、巴水作品の熱心なコレクターのひとりであった事は有名な話です。



川瀬巴水 昭和14年撮影

〈巴水と塩原温泉の関わり 第二の故郷 塩原からはじまった絵師の道〉

版画家川瀬巴水・・・そのデビュー作は塩原の風景

大正7年（1918）、幼い頃からよく滞在していた塩原温泉を描いた「塩原三部作」を制作しました。

これが巴水のデビュー作となっています。これを第一作として終生、夜、雪、雨などといった詩情的な風景版画を中心に600点ほどの作品を残しました。巴水は、塩原温泉で過ごしている間、訪れる度に、温泉街の風景や宿からの風景、渓谷景観の四季を写生し、塩原を題材にした作品も数多く残しています。

巴水は、病弱だった幼少期、塩原温泉福渡地区（塩原温泉ビジターセンター施設が佇む同地区）で、土産物店を営んでいた伯母（垣本なつ）夫婦の元を毎年のように通って滞在をしていました。

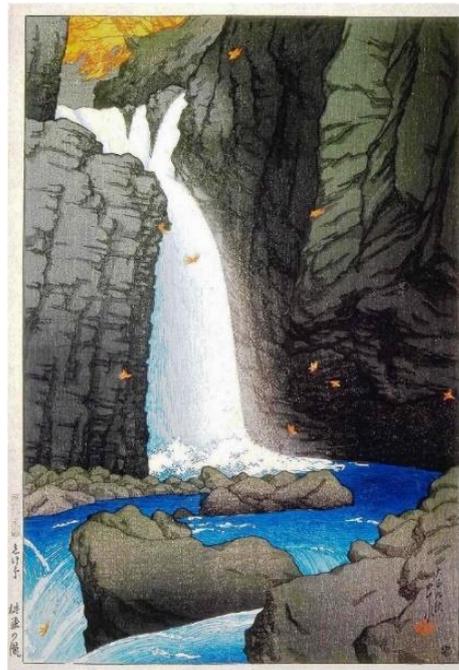
また、太平洋戦争時の1944（昭和19）年から1948（昭和23）年まで、夫婦で塩原温泉同地区に疎開し、その後も度々訪れております。塩原の地元の人々は親しみを込めて「版画の文ちゃん」と呼んでいたそうです。

「旅みやげ第一集 志ほ原雄飛の瀧」

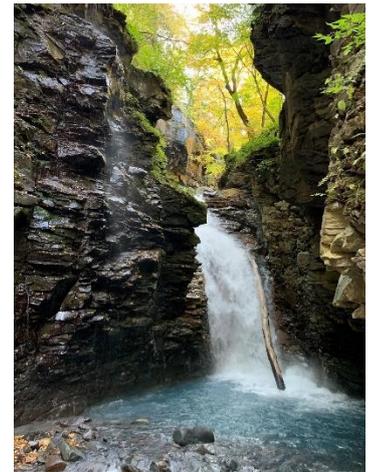
（1920（大正9）年 秋）

版元：渡邊庄三郎

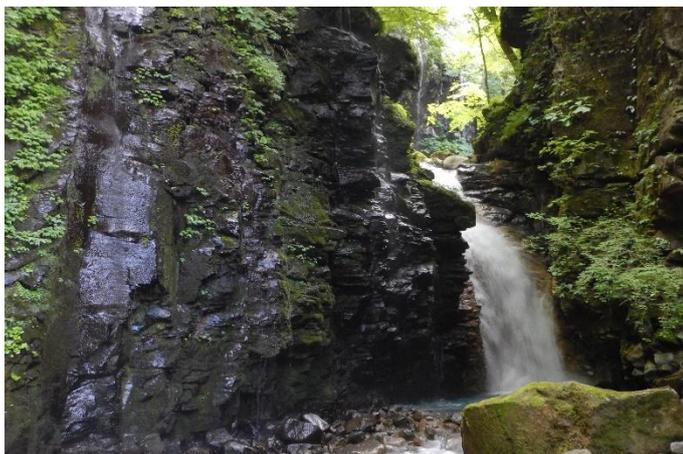
「塩原の塩乃湯の山奥には五つばかりの瀧がありますが、其のうちでも殊に此の瀧がすぐれております。苔滑らかな高い巖壁が、まるで屏風のやうに両側に立連なって、その瀧壺は暗く且つ物凄いです。そこへ青白くドッド落ち込む瀧の凄まじさは、全く雄飛の名背かないと思ひます。」と、巴水はこの作品について述べております。



川瀬巴水作品



現在の雄飛の瀧



雄飛の瀧が作り出す渓谷景観

◆本散策コース上、「雄飛の瀧」（瀧の下）に行くためには、一部歩道を外れ、沢筋をたどるルート（約100M）箇所有り。（案内標識無し）。その箇所は、沢の増水等により状況が毎年変わる。訪れる際は無理をせず、安全に十分配慮したい。

◆自然公園散策マナーを守り、森の一期一会を楽しみましょう

自然散策・観察する時は、許可無く動植物の採取などを行わないよう、公園マナーを守りましょう。また、ご自身の体力や体調を過信せず、季節の気候変動にも十分に配慮して、安全な自然散策を心がけましょう。